

家族システムの変遷

—国家とイデオロギーの世界史

(4) 「識字化した核家族」の時代

西欧の家族システム

ユーラシア大陸の中央部の家族システムが「核家族→直系家族→外婚制共同体家族→内婚制共同体家族」へと発展を遂げていた頃、西ヨーロッパはどんな状態であったのか。

拡大当初のローマが中東から受け取っていた共同体家族が、征服した核家族地域に侵蝕されて後退したことはすでにご説明しました。その痕跡は、現在、イタリア中部の共同体家族地域（ちなみに共産主義が定着した地域です¹）、平等主義核家族（フランス中心部、カスティリヤ語圏スペイン、中部ポルトガル、南イタリア）の「平等」イデオロギーに残るのみとなっています。

文明の中心地から見れば「辺境」であったこの地域では、共同体家族が自律的に発生することも、伝播によって広がることもなかったのです。

西欧の基層に共同体家族システムが存在しないことは、ローマ帝国滅亡の後、この地域に帝國的統一の動きが起こらなかった理由を説明するでしょう。

そういうわけで、西欧に残る主な家族システムは、核家族（絶対、平等、より原始的）と、直系家族の二種類となりました。初期のメソポタミアと同じ状況です。

「家族の核家族性、女性のステータスが高いこと、絆の柔軟性、個人と集団の移動性。ここにおいて起源的として提示される人類学的類型（家族類型）は、大して異国的なものとはみえない。最も深い過去の奥底を探ったらわれわれ西洋の現在に再会する、というのが、本書の中心的な逆説なのである。」（起源1・上45頁）

¹ 起源1・下448頁。

しかし、まさしく「逆説」的なのは、その「起源的」状況こそが、世界を席卷することになる「近代国家」を生んだという事実なのです。

「絶対核家族・自由・国民国家」の三位一体が誕生するメカニズムは、(1)でもご説明しましたが、具体的な過程と合わせて、改めてその経緯を見ておきましょう。

直系家族の発生と伝播

「国家」の誕生を可能にする基層、直系家族を、西欧で最初に発生させたのは、トッドの仮説によれば、フランス北部でした。

「フランク王国の歴史をたどるなら、長子相続という概念の出現の年代を、現実的正確さをもって決定すること、そして西ならびに中央ヨーロッパにおける直系家族の発達の出発点を確定することができ
る。……クローヴィス²の子孫にとっても、シャルルマーニュ³の子孫にとっても、王国を分割するというのが規範に適ったことである。長子への遺産相続の規則が出現し、盛行するようになるのは、10世紀末になってからにすぎない。……西フランクにおいては、男子長子相続制の出現は、新たな王朝、カペー朝の出現、そしてとりわけ、フランス王国の安定的形態の出現に対応している。」

「さてそこで、長子相続はヨーロッパの社会的再編の歯車になって行く。カロリング帝国の崩壊とともに、全般的な階層序列的社会形成が進行した。宗主としての支配と封臣としての従属という観念は、上から下へと連なる従属関係、貴族社会の縦型で不平等主義的な形式化を確立していくのである。」（起源・下597頁）

43 (10) 世紀末、フランスの貴族の下で直系家族が成立し、中世封建社会の幕が開きます。ちなみに、この少し後で、日本でも同じことが起こります。

「秩序と無秩序とを組み合わせるとまとめ上げられるこの方式は、いかにも独創的ではあるが、これは古代中国と中世日本において実践され

² メロヴィング朝フランク王国の初代国王。在位メソ紀3781-3811 (481-511)。

³ カロリング朝フランク王国の王 (在位：メソ紀4068-4114(768-814))。

ていたものでもある。封土は安定し整然とまとめられたが、弟たちは内戦や十字軍戦役を求めて街道を駆け回る。日本とヨーロッパの発展過程の類似には驚くべきものがある。」（起源・下598頁）

フランス北部で生まれた直系家族は、ヨーロッパ各地に運ばれていきますが、運ばれた先で、同じように定着したわけではありません。

代表的なところでいうと、ドイツには大いに定着します。しかし、パリ盆地の農民や、イギリスの農民には定着しない。その結果、後者は、純粹核家族の地域となるのです。

いったい、何がこの二つの流れを分けたのか。トッドは、その要因を、当時の農業の仕組みに求めています。庶民である農民に直系家族が農民の間に拡大せず、絶対核家族を生むことになったイギリスの例を見ていきましょう。

国民国家の誕生

フランス北部でメソ紀 43世紀（10世紀）末に発生した直系家族の影響は、すぐにイギリスに及びます。メソ紀4366年（1066年）、フランス貴族であるノルマン人、いわゆる（？）ノルマンディー公ウィリアムがイギリスを征服したからです（ノルマン・コンクエスト）。

ノルマン貴族が持ち込んだ直系家族は、しかし、農民の間に広がることはありませんでした。なぜか。

一言で言うと、直系家族の核心である、「農地の不分割」（単独相続）の規則は、イギリスの農民には、単に必要なというだけでなく、ほとんど意味をなさないものであったからだと考えられます。

西欧の農地制度は、非常にざっくりいうと、家族経営の地域と、集約的な大規模農業経営の地域に分かれます。

イギリスやパリ盆地のフランスは、後者の典型で、非常に早い時期に大規模農業経営が始まり、農民は、工場労働者と同じ意味の「農業労働者」に近いものになっています。

「こうした地域、こうした農地制度の中に、直系家族は定着することができなかつた。直系家族には機能上の正当化の根拠がなかつたからである。」（起源・下601頁）

所有者としてであれ、小作権者としてであれ、子どもに相続するべき土地や財産を持たない農民に、長子相続の規則は意味を持ちません。そのため、これらの地域では、貴族と一部の富農以外の間には、直系家族が広がりませんでした。

「パリ盆地の農民は、最終的には直系家族の概念的反対物に他ならぬ平等主義核家族によって構造化されることになる。イングランドでは、直系家族概念が暴力的に、しかも時期尚早で導入された結果、それは挫折することになり、その挫折が絶対的核家族の発明へとつながって行く。」（起源1・下601頁）

こうして、フランス、イギリスには、社会の支配層を占める直系家族と、核家族の民衆の組み合わせによる国家が誕生する。これが国民国家である、ということは、すでに述べた通りです。

純粹核家族—安定の秘密

機能的に見ると、直系家族が誕生させた国家と、核家族の国民との組み合わせは、非常に理にかなっているといえます。核家族は、システムの内部に、農村の相互扶助機能の代替物を持っていないため、都市化が進めば必ず公的な扶助が必要になる。直系家族の国家は、彼らに、その機能を提供することができます。そして、彼らが国民となってくれることで、直系家族の国家は、繁栄に必要な「大きさ」を確保することができるのです。

そういうわけで、直系家族が作った秩序の上に、「反権威」のイデオロギーを抱くようになった純粹核家族システムが乗った、イギリス、フランス、そしてオランダでは、安定した国民国家が築かれ、順調な発展を遂げました。

現在、イギリス、オランダ、フランスの国家としてのアイデンティティの源は、純粹核家族のシステム（絶対核家族（自由）、平等核家族（自由と平等））に求められています。

純粋核家族の「自由」の本質は、直系家族の権威への反感、「反権威」ですから、「権威」の誕生こそが国家の生成を促したという歴史を知る者から見ると、彼らの国家はちょっと不思議です。「反権威」を旗印にした国家なんて、成り立つのか？」

しかし、彼らが意識していようがまいが、純粋核家族と直系家族はセットです。純粋核家族の出自には必ず直系家族が関わっており、それが純粋核家族国家の安定を可能にしているのです。

イギリスやオランダの場合には、その痕跡は、王室や世襲貴族という目に見える形で残っています。フランスは、王や貴族を廃止しましたが、その国土の半分を占める直系家族地域が、「痕跡」どころではない存在感を発揮しています。

純粋核家族の生態(?)を知るために、科学者だったら、こんな実験を試してみたくなるかもしれません。

純粋核家族を、直系家族の痕跡を残す出生地から切り離し、(システムの)空白地帯に移植したら、どうなるか。それでも、安定した国家を運営して行くことができるのか？

その実験と同じことが現実になされている土地があります。アメリカです。

アメリカという国は、空白地帯でこそ発揮される「自由」の活力と、重しを持たない純粋核家族の不安定さを見事に体現しているといえるように思います。

「トッド入門講座」として、書きたいことがたくさんありますが、ついでに取り上げるには大きすぎる話題なので、機会を改めて、扱うことにさせていただきます。

辺境の西欧から—識字がもたらす逆転劇

この辺で、メソ紀47世紀(14世紀)頃の世界を俯瞰してみましょう(視野に入っていない地域がたくさんあってすみません)。

ユーラシア大陸の中心部では、モンゴルが去った後、共同体家族が帝国を統べていました。オスマン帝国が起り、ティムールが活躍し、中国では明が建国されていた。

同じ頃、辺境のヨーロッパや日本には、直系家族か核家族しか存在せず、家族システムの「進化」という観点から見れば、中東の約5000年前と同じ状況にありました。当然、そこにはコンパクトなサイズの国家や地域政権しかありません。

しかし、この後、直系家族と核家族の組み合わせがもたらすダイナミズムが功を奏し、辺境側の国力が急激に高まるのです。その動力こそが、教育とりわけ「識字」の力でした。

「メソポタミア・エジプト・中国での文字の発明以来、文字発達の大きな過程として歴史を描くことは、単純で有効なことである。発明と技術的対抗、工芸上の戦争と革命に満ちたヨーロッパ史の舞台裏に、中世後期以来、初めはゆっくりと、後に加速された教育の動きを感じることができる。プロテスタントの改革は、画期的な出来事だった。というのも、それは、聖者の書物へのすべての信者のアクセスを要求したからである。しかし、それも、印刷機の発明の後に出てきたのであり、印刷機自体は、文字の相当な普及により生まれた。17世紀から始まる、オランダ・イギリス・スウェーデン・プロシアのプロテスタント諸国の経済的・政治的地位向上は、この文化的突破口の経済的・政治的反映に過ぎない。カトリック諸国は、フランスを筆頭に、幾分躊躇した後、後に続いた。そして、大衆の識字は、20世紀ヨーロッパ文明の基本的な特徴の一つになり、やがて、他の地域に拡張されていった。」（『経済幻想』56-57頁）

直系家族の寄与—文字の誕生から大衆識字化まで

国民国家＝近代国家の確立という点で先頭を切ったのはイギリスの核家族であり、直系家族は大分遅れを取るようになるのですが⁴、「西欧近代」の成立に対する直系家族の寄与は本質的です。

すでに見たように、直系家族は、原初的核家族に「国家」を与えることで、純粹核家族の成立を導きました。その次に、直系家族は、その「世代間伝達能力」を活かして、西欧の識字化を先導するのです。

（文字と直系家族）

識字の以前に、直系家族は、「文字」の誕生そのものに大いに関係していると考えられます。

この講座では、直系家族の発生と小規模な国家の発生がリンクしていることを見てきましたが、大体同じ頃に文字も発生しているのは、おそらく偶然ではありません。

メソポタミアで直系家族が生まれ、都市国家が誕生したのは、メソポタミアで文字が誕生したメソ紀元年（前3300年）と同時期です。

中国では、文字が誕生したのはメソ紀19世紀（前14世紀）。やはり、中国が直系家族を生成させていた時期で、殷王朝が興ったとされているのもこの頃のようにです。

文字とは、情報を書き留め、後世に伝えるための手段ですから、家系の永続を期する直系家族の生成と文字の誕生が同期することには、なんの不思議もないのです⁵。

⁴ 「直系家族が民衆の間であまりにも成功したところ、つまりドイツやイベリア半島・オクシタニア空間においては、国家は領土の面では拡大することを止めた、まるで〔土地の〕不分割原則が小国家の非集合原則によって補完された〔＝置き替わった〕かのように」（起源1・下621頁）。ドイツ統一が1871年まで成し遂げられなかったのがその典型といえます。

⁵ 以上につき、Lineages of Modernity, pp.105-6.

文明の最初期に文字を誕生させた直系家族は、その4800年後、識字率の大幅な上昇という局面で、再び、大いに存在感を発揮することになります。

(近代以前の識字)

ヘレニズム期の社会の識字率を算定するという大胆な試みを行った人がいて、彼は、当時のもっとも発展した都市でも、男性識字率が20-30%を超えることはなかったと結論しました。

こうした仕事を受け、トッドは、文化・学問が大いに栄えた古典古代においても、社会全体の（おそらく男性の）識字率はせいぜい10%程度にとどまっていたであろう、と述べています。

メソポタミアの識字率を知る手立ては（私には）ありませんが、トルコで男性識字率が50%を超えた時期がメソ紀5232年（1932年）というところから見て、オスマン帝国までの4000-5000年の間は、ヘレニズム期の数字を大きく超えることはなかったと見てよいのではないかと思います。

西欧に関していうと、識字率はヘレニズム期をピークに、低下に転じます。低下傾向は西ローマ滅亡で加速し、再び上向きに転じるのは、メソ紀44-46（11-13）世紀頃でした。

西欧で、識字率の劇的な上昇が起こるのは、メソ紀49-50（16-17）世紀。このときの主役が、誰だろう、直系家族であったのです。

(ドイツにおける識字率の上昇)

この時期の識字率の上昇が、活版印刷術の普及（グーテンベルクの仕事はメソ紀4754年(1454)）、ルターの宗教改革（メソ紀4817年（1517）-）に関連することはよく知られています。

「大衆の識字化は、そもそもプロテスタントの基本的目標の一つであった。その必要性は、次のような純粹で強硬な三段論法によって導き出される。

- 1 ルターは、われわれはすべて聖職者だと断言している。
- 2 聖職者とは、（近代以前の人間の考えでは）文字を読むすべを知っている者のことである。
- 3 それゆえ万人が聖職者となるためには、万人が文字を読むすべを知らなくてはならない。

このためプロテスタント教会は次々と、都市住民と農村住民の読みの習得を力強く奨励したのである。」（新ヨーロッパ大全I・上 176-177頁）

ドイツのプロテスタント地域の庶民たちは、ドイツ語に翻訳され、活版印刷された聖書を手元に置いて、読み書きを学びます。そうして、メソ紀4970年（1670年）、世界で初めて、男性識字率50%を達成するのです⁶。

この一連の出来事は、いったいなぜ、ドイツで起きたのか。

トッドは、直系家族、プロテスタンティズム、識字率の三要素が、相互作用によって、それぞれを強化する関係に立ったことを指摘しています。

直系家族 ↓↑ プロテスタント	<ul style="list-style-type: none"> ・「権威」「不平等」のイデオロギーが教義（予定説）を生む 権威→神が救済を決定する（人間の意思は無関係） 不平等→すべての人間が救済されるわけではない ・プロテスタントの普及とともに直系家族が拡大・強化される
プロテスタント ↓↑ 識字率	<ul style="list-style-type: none"> ・プロテスタントの普及が識字率を上昇させる ・識字の普及によりプロテスタントの信仰が普及・強化される
直系家族 ↓ 識字率	<ul style="list-style-type: none"> ・直系家族の教育力により、識字率が上昇する

家族システムとキリスト教の教義に関するトッドの分析は大変鮮やかで、興味深いものなので、いつか個別にご紹介させていただく予定です。

（イギリスのテイク・オフ）

識字化において先頭を切った直系家族地域は、その保守的傾向のために、近代化ではイギリスに先を越されることになりました。しかし、イギリスの識字率上昇（男性識字率50%越えはメソ紀5000年(1700年)）も、プロテスタントの影響、自国内および近隣地域における直系家族の存在なしに考えることはできないので

⁶ スウェーデンも同じ時期に達成している（直系家族である）。ドイツのプロテスタント地域で女性の識字率が50%に達したのは150年後のメソ紀5120(1820)年であったが、スウェーデンでは20年後の4990(1690)年であったから（女性のステータスの高さの反映である）、国民全体ではスウェーデンが先行したことになる。

す。イギリスの優位は、①プロテスタント、②直系家族地域の存在、③核家族の流動性、の3点が揃っていたことにあるといえます。

ともかく、このようにして、辺境の中でもとくに辺境であったイギリスにおいて、「識字化した核家族」が「西欧近代」の幕を開くことになりました。

核家族による「帝国」支配

西欧諸国と比較して、中東地域の識字化時期を見ると、トルコが5232年（1932）年、シリア 5246（1946）年、イラク 5259（1959）年、イラン 5264（1964）年。イギリスと比べると、200年以上の遅れが発生したことになります。

メソポタミア文明以来、5000年の間（メソ紀5000年（1700年）頃まで）、共同体家族システムの基層の上で、文明の中心地であり続けた一帯は、「識字化した核家族」に、覇権を譲り渡すことになるのです。

「……かつての超大国オスマン帝国を脅かしはじめたのは、近代西欧の台頭であった。その威力は何より、近代西欧における軍事の組織と技術の革新に求められる。

1529年の第一次ウィーン包囲の際のオスマン軍の肅々たる撤退と、1683年の第二次ウィーン包囲の際のオスマン軍の潰走は、まったく別のものではあった。その1世紀半の間に、西欧では社会体制の変化と軍事組織・技術の革新が起こって、両者の力関係は逆転してしまったのである。」（鈴木董『オスマン帝国』251-252頁）

西欧が興隆した後の歴史をこれ以上見ていく必要はないでしょう。しかし、家族システムの変遷の観点から世界史を追っている私たちとしては、一つ、確認しなければならないことがあります。

核家族が覇権を握った後、共同体家族が作り上げた「帝国」秩序がどのように変わったのか、という点です。核家族は、メソポタミア文明勃興の地に、秩序をもたらすことができたのでしょうか。

	Literacy of men	Literacy of women
Protestant Germany	1670	1820
Sweden	1670	1690
Great Britain	1700	1835
United States	(1700)	(1835)
Germany (Overall)	1725	1830
France	1830	1860
Italy	1862	1882
Japan	1870	1900
Russia	1900	1920
Turkey	1932	1969
China	1942	1963
Syria	1946	1971
Iraq	1959	2005
Iran	1964	1981